7

象設計集団

［プロフィール］

1971年	象設計集団 東京に設立
	（創設メンバーは富田玲子、樋口裕康、大竹康市、重村力、有村桂子）
1988年	台湾事務所を設置
1990年	東京から北海道十勝へ移転
1994年	東京事務所を設置
現在	十勝・東京・台湾の3拠点で活動

［プロフィール］

1939年	静岡県に生まれる
1963年	早稲田大学理工学部建築学科卒業
1965年	同大学大学院修士課程修了
	吉阪隆正が主宰するU研究室に所属
1971年	象設計集団を設立

［プロフィール］

1938年	東京都に生まれる
1961年	東京大学工学部建築学科卒業
1963年	同大学大学院修士課程修了（丹下健三研究室）
	吉阪隆正が主宰するU研究室に所属
1971年	象設計集団を設立

特集2｜本論

断片的シーンいくつか

植田 実
Makoto Ueda

ドーモ・アラベスカ[提供:象設計集団]

ドーモ・バレッラ[提供:象設計集団]

ドーモ・セラカント[提供:象設計集団]

杏の家[提供:象設計集団]

象の全作品を通して、とんでもない無邪気な表情をみせているのは「ドーモ・アラベスカ」[1974]である。木造2階建て、瓦屋根の家がまるごと一本の樹木に見立てられている。道に面した壁面を玄関のところだけ引きこませて小さなポーチをとり、その分厚い玄関ドアには太い幹と枝が抽象的に形づくられている。やや奥まったところだから陰影が深い。一方、その頭上に曲面状に張り出した異形の窓は光を受けて輝いている。木漏れ日のようにも見えるのは、幹に見立てた玄関ドアからこの窓まわりにかけての漆喰の壁一面に大小百数十もの同じ漆喰づくりの葉が散らされているからだ。この葉がなければ家は樹木に見えない。

それにしてもこれほどのナマの具象が、装飾や壁画あるいはサインや付加的な像としてではなく、建築そのものをベタベタという感じで覆い、変容させた例は、近現代住宅にはまずみられない。アントニオ・ガウディにおいてすらもっと暗示的な造形や構成である。象のほかの住宅も、樽(「ドーモ・バレーラ」[1972])、シーラカンス(「ドーモ・セラカント」[1974])、うろこ(「ドーモ・スクヴァーマ」[1976])などの呼び名を持ち、それぞれの形態を連想させるようにできてはいるが、アラベスカのように直接的ではない。「杏の家」[1981]が唯一、前者に似た樹木の形象でやはり漆喰の外壁を覆ってはいるものの、幹から枝、葉の梢にいたるまでの姿がより写実的であるために、かえって普通の装飾壁画として見えてしまう。それはアラベスカの衝撃から7年後の余裕をみせた変奏のひとつとも言える。アラベスカは無邪気である以上に、アナーキーなのだった。

象による住宅は、建て主をも併せて等し並みにそれぞれの個性を持ち、びっくりするような見えがかり以上にそのプランニングはどれもよく考えられ充実している。それを前提としても、あっけらかんとした“葉っぱ”は建築における具象圏全体を支配してしまった。それを現実化した左官技術は、昨今でこそだれもがその利点を口にするが、当時は現代住宅から見離されていた。それを堀りおこしたといっていい。この表現と技術の発見。象はまずここに居る。

–

こどもが使う施設というものを、象が厳密な計画理念にのっとって設計した最初が「宮代町笠原小学校」[1982]ではなかったか。ここには何よりもこどもという既成概念との対決が初々しく感じられるからだ。これは私の勝手な印象だが、同じような施設設計に長年の経験がある設計者が手がけたこどもの活動の場は多くのばあい、いかにも“現在”の潑剌さにあふれている。つまり今のこどもという存在が強く迫ってくる分だけ、逆にコントロールされた領域のように思えてくるのだけれど、それに対して、笠原小学校のこどもたちは得体の知れない時間のなかに捕えられているような気分に襲われる。自分自身がこどもだった頃の体感を生々しく誘い出すような気分とも言える。

この学校を撮影した山田脩二や古館克明の写真にはこどもたちがたくさん見られるが、例えばお昼には好きなところでお弁当を食べている彼等は楽しげでもあり、それぞれがひとりぼっちのようにも見える。また体育の時間だろうか、廊下に集まって歩いたりすわりこんだりしているこどもたちは統一がとれているような、ばらばらなような。その落ちつかない佇まいは身に覚えがある。他人事ではないほどに。

その背景に無数のコンクリートの角柱が立ち並んでいる。それに背をあずけているこどももいる。この学校を特徴づける列柱群だが、さらにそこにはさまざまな言葉がひらがなで浮き彫りになっている。最初に訪ねたときには「こんにちは」、「いちねんせい」、「おててつないで」、「ゆうやけこやけ」などの言葉が微笑ましく思えたのだが、二度目に行ったときには、「たってなさい」、「おなかのむしがないている」、「おわれてみたのは」、「ほうにあたる」などが眼に入ってきて驚いた。よく知っているはずの唱歌やかるたの文句も断片化すると言葉の底知れない力が湧き出してくるような気持ちになる。なかには「はらをきる」などという怖い言葉さえ堂々と掲げられているし。かつてこどもは大人の言葉が立ちまざる暗闇のなかで成長した。象がたくらんだのは、こどもを、明快であるほど限定的なこども環境から引っ張り出す仕掛けだったのではないか。今の社会の、薄手の明快さに対する、それは反撃でもある。

笠原小学校は、廊下まで生活の場として広さも確保し、さまざまな面白いコーナーもしっかりとつくり、何よりも森や山の自然に直結させている。しかしそれはこどもにおもねり、こどもの時間をつくろうとしているのではない。

過去・現在・未来、いやそんなきれいごとではなく象語を使えば「あいまいもこ」な時間のなかに、何処からか来たりし者への畏怖と未だ到着しない者への憧憬を通して、こどもたちを永遠のすみかのように引きとめて帰さない場をつくろうとしている。「まるで竜宮城のよう」と感想を述べたこどもがいたという。この学校のありようを無意識のうちに知ってしまったにちがいない。

その後も象が手がけてきたさまざまなビルディングタイプの施設は、どれも特定機能の完結に逆らい、ごちゃごちゃと入り組んで建物の外に、まちのなかにあふれ出てしまうような場をつくり出している。

–

象の建築を撮影した写真は、しんとした竣工写真と違ってそこに人々がいるシーンが多い。それが強い印象を与えているのだが、人がソファでくつろいでいたりキッチンで調理をしていたり、大学のホールや食堂に学生たちが群れていたりする写真はほかの建築でも見られないことはない。つまりこのように建築が使われているという説明だが、象建築のばあいはそうではなく人々がそこに“乱入”している。祭やパーティの場面でみんな笑顔で集まっている場の写真でさえ、これから何事かがおっ始まるかのようなただならぬ空気がみなぎっている。ただならぬ空気とは、その建築に目を瞠り夢中になり没頭していく前兆を言う。彼等の建築に対するとき、わが心身ににわかに生じるのはこの乱入感である。使い勝手のよしあしを客観的に判断する以前に襲ってくる感覚である。「宮代町コミュニティセンター進修館」[1980]が最近になってコスプレの少女軍団に乱入され、白昼夢のようなシーンを展開しているのも、この作用が衰えていない証拠である。

–

沖縄へは象に導かれてその風土に入ることができた。35年ほど前のことだ。当時書いた文章を引用する。「象設計集団・集落都市研究会が数年前から計画作成に参加してきた沖縄の名護市、恩納村、今帰仁村などにおける調査報告をみると、詳細な調査の結果、水系、森、緑系が分かちがたく結びついた生活と生業の環境や海岸線を構成する自然が総合的に可視化されている。ここには従来方式の開発を拒絶する認識が、いかに政治的経済的文脈から建築や計画を批判しても変えることのできなかった世界の表象に抵触して、内容的裏づけを伴って現れている」(「生活・生業の表現—吉阪隆正の作図法」『みづゑ』1975.10｜『都市住宅クロニクルI』[みすず書房/2007]に収録)。

そうした調査のひとつとしてとりわけ記憶に残っているのは平井秀一(現「鰐」主宰。Team Zooに関わる)の「方言地名」の調査で、よそ者には意味を理解できない、その地域の特定集団が共有している地名とその土地・地形・景観を見ていく調査だったと思う。その“方言”は私たちが共通に理解している例えば山、丘、森、原、道、川原、浜などの呼称と単純に対応していない。私たちの知る言葉ではふたつに分かれている地形がひとつながりになっていたり、逆にひとつの言葉がいくつにも細分化されていたりする。それは生活者が必要とする土地・地形・景観に対応した“方言”であり、とくに重要な秘められた場所や目に見える場所の微妙な特性までもがそこに映しこまれている。だからいわゆる客観的な地図を持ちこんで地域計画をすすめようとすると、そこに根づいている生活の地域空間像とのあいだにズレが生じ、強行すれば生活の場を破壊してしまう。

以上は私なりの解釈による要約だが、こうした成果と平行して象の多くの研究者や建築家たちが沖縄の風土、人々、生活を徹底してサーヴェイし描きつくし、現地に同化していった。私の家族や親族知人たちも、平井をはじめとするZooの仲間たちに迎えられてその一端を知る夏があったのだった。とくにこどもたちはそこから計り知れない感化を受けた。

1971年の象設計集団の設立からすぐ、「沖縄こどもの国マスタープラン」[1971]、「波照間の碑」[1972]、「恩納村基本構想」[1972]、「名護市総合計画・基本構想」[1973]、「今帰仁村総合計画・基本構想」[1974]等々と、沖縄に関わる仕事は切れ目がない。そのなかから「今帰仁村中央公民館」[1975]や設計コンペティションで応募登録795、応募点数308の頂点に立った「名護市庁舎」[1981]が象の沖縄における代表作と見做されているのだが、ほかに実現された場所や建築の質の高さと数の多さは並み大抵ではない。それほど太い深い根である。

それらの建築群、碑、公園は、ひとつには自力建設という手段を通しその土地と融合している。しかしその一方ではあくまで設計されたものである。象だけじゃない、すべての建築家に課せられているのは、建築がその土地、その歴史をどう体現しているかなのだが、外からやって来た建築はどれほど既存の家並みのなかに身をひそめようと、また古くから伝えられた自然の気象や土地の慣習の教えをとり入れようと、完全に同化することはない。むしろ土地性を言挙げするほど、建築家の建築は逆に弱くなり嘘になってしまうとさえ言える。

象は断固とした解答を持っている。象の建築は一種異様な現れとなって立ち上がる。見える形態としてこれが

宮代町笠原小学校
上——芝生の庭で遊ぶ生徒たち/
下——ひらがなが刻まれた列柱

名護市庁舎

今帰仁村中央公民館の赤い列柱

名護市庁舎
上――シーサー／下――アサギテラス

すべてである。

今帰仁村中央公民館の276本の赤い列柱とウッドローズやブーゲンビリヤで覆いつくされた屋根、名護市庁舎の南面ファサードに集められた56体のシーサー、あるいはその裏手北側に重層するアサギテラス。こうしたエレメントそのものはこれらの建築に共通して使われている多様なコンクリートブロックと同じように土着のものでありながら、過剰なまでに集積した形をとると思いがけないほどの異相となって現れる。例えば名護市庁舎のシーサー群について当初は地元ではこういう扱い方はしないという戸惑いの声すらあったという。

けれども土地とは本来、そこに定住する人々と外から訪れるよそ者とのイメージの交易によって初めて可視化されるものではないか。だれもが自分が生まれ育った土地をじつは知らない。そこには光が射しこまない。記憶と生活が形を無意識の闇に塗りこめている。沖縄だけではなく、北海道までの日本全土に及ぶ、あるいは台湾をはじめ世界のそこここにおいて、象の建築は土着の記憶と生活への身を挺しての共感、すなわち光である。光は一瞬、暴力のごとくに土地の人々に迫る。

エレメントを過剰に束ねることは象の戦略としての個性を持つにいたっているが、それは同時に建築を解体し、岩や土や樹の様相に近づける作用でもある。そのように個々の土地に対応している以上に、解体された建築が土地そのものを醸し出す作用を象は心得ている。都会のビルのなかの展示会場、例えば「少年ジャンプ・ジャンプマルチワールド展示設計」、ギャラリー間の象設計集団展「石の上にも二十三年」[共に1993]などにおいてさえ、幻の土地を現前させてしまう力技は、建築作品と血続きである。

–

象設計集団と名乗っているが、だれまでをその構成員として数えていいのかよく分からない。プロジェクトごとに地元の人が参加したりするが分けへだてがないようにみえるからでもあり、さらにTeam Zooの拡がりのなかでみれば、アトリエモビル、いるか設計集団、アトリエ熊、鰐…と、境界も果ても定かでない。しかもみんなが自由に活動している。けれども“設計集団”のかたちははっきり見える。バイソンやペンギン、アホウドリやマイワシの群れが暴走し、身を寄せあい、一斉に飛び立ち、旋回し、それは個々の動きでありながら美しくまとまっているのが自然の力によってであるように、Zooの行動が自然の流れに乗っているからだ。

その始まりの頃、富田玲子、樋口裕康、大竹康市がグループ名を考えたときは三人の頭文字をとってTHOと呼ぶ案もあったという。そこに重村力、有村桂子が加わった時点でTHO(ðou)は象という具体の名に一挙に転じ、Team Zooはあちこちの動物たちの目を覚ますことにもなった。これは当時それとなく聞いた象創成のエピソードであるが、彼等はそれぞれに、抽象的なコンポーネントの抽象的な構成としての建築の先に、具体的なものへの強い関心をなぜか共通して抱いていた。その詳細についてはこれまでに何度か触れたことがあるので省略するが、ひとつだけ、大竹康市が私に語った言葉を再録しておく。「ぼくらは、魚のように植物のように息づくものをつくりたいと考えるとまっすぐ突き進んでいっちゃう」(『別冊都市住宅 住宅第11集』1975秋)。

その後現在にいたるまで、協同設計チームと言われるものは数多く組織されてきた。そのチーム名は、メンバーの名を連ねていたり、アルファベットで記号化されていたり、夢のようなイメージであったりだが、象のような簡潔さと包括力には負けている。そして象は具象の直接性にとりつかれてしまったがゆえに、それを建築化するために乗り越えなければならない困難をつねに自らに課すことになる。

象設計集団は、だから協同設計チームとはどうしても思えない。言ってみればその総体はひとりの建築家、ひとりの人間であり、象の創成は歴史ではなく現在をそのまま生きている。だから1983年、大竹康市がサッカー試合の最中に倒れて急逝したことはたんなるメンバーの欠員を意味しなかった。30年近くが経つ今も、象の限りないエネルギーは哀しみを帯びてもいる。

うえだ・まこと――住まいの図書館出版局編集長、建築評論家／1935年生まれ。早稲田大学第一文学部フランス文学専攻卒業後、『建築』編集部。
1967年、鹿島出版会入社。1968年創刊の『都市住宅』編集長となる。1975年、エーディーエー・エディタトーキョー入社。1987年～、フリーの編集者。
主な編著書：『ジャパン・ハウス』[グラフィック社／1988]、『真夜中の家』[住まいの図書館出版局／1989]、『世界の集合住宅 20世紀の200』[共編、大京／1990]、『アパートメント』[平凡社／2003]、『集合住宅物語』[みすず書房／2004]、『植田実の編集現場―建築を伝えるということ』[共編、ラトルズ／2005]、『建築家 五十嵐正』[西田書店／2007]、『都市住宅クロニクル』全2巻[みすず書房／2007]、画文集『磯崎新・百二十の見えない都市』[企画編集、ときの忘れもの／2001～]など。

演劇のように

重村 力
Tsutomu Shigemura

つくったばかりの象設計集団では仕事はたくさん入る予定であったが、営業の詰めが甘く面白いはずの仕事は次々にUn-Builtのリストに入っていった。だが誰も一向に落ち込んだりはせず毎日が楽しかった。金も仕事も少ないのでゆっくり作業をしていた。時間は濃密に流れ、退屈をすることはなかった。麹町の小さなマンションの最上階の端の北向きの小さな部屋で仕事をしたのだが、原寸などは屋上のベンチレーションブロックの目地に白墨で図面を描きダブル段ボールを建ててつくった。暇が多く、皆で冗談を言い合い、どう今日を楽しく過ごすかに精力を傾注した。退屈するといろいろな遊びをやった。社長と部下などの配役を割り振り、外車のディーラーに電話をかけセールスマンを呼んで買うふりをして遊ぶなどということは、お金がかからず暇のあるわれらの遊びのイロハであった。そのうち仕事の話も人も次々と異邦人のように舞台にやってきた。仕事のたびに地域を根源から学習し、そのつど不思議な世界を発見する。もともと通常の建築では満足しないのだから、根源的なプログラムを求める結果として面白い異なる地平の人物に出会う。

–

沖縄返還が決まり、復帰に向けて日本政府が沖縄に南方同胞援護会(後の沖縄協会)を通じて施設整備を始め、コザの小さな「(沖縄こどもの国)こども博物館」[1972]を私たちがつくることになった。沖縄は1972年5月までは日本の施政権はなくドルの世界であり、総理府発行の特殊な身分証明書で渡航する外国扱いの世界である。沖縄それ自体が不思議世界である。離島、亜熱帯、珊瑚礁、植物、民芸、米軍文化、基地、ロック、ヴェトナム戦争、スーパーグラフィック、琉球民謡、カチャーシ、沖縄料理、それらに加えて強烈な建築文化、集落空間がある。丸山欣也が世界各地の放浪的建築修業から日本に定着した頃で、スイス人の妻と娘と犬を連れて事務所にちょくちょく来た。マルキンの時間は平気で24時間遅れたりするが、マルキンの沖縄のグスクのスケッチを見てまた驚く。沖縄を見なきゃと思うようになる。那覇でアドプロというデザイン会社を経営していた徳永盛保も強烈であった。バイクとジーンズのヘビメタ中高年の彼から基地の中の世界やアメリカの社会運動や現代ロックについて聞き、沖縄でいろいろなことに熱中している面白い人々について人脈が広がっていった。後に企画室長、都市計画課長から名護市長になる岸本建男は定職がなく、基地周辺整備事業に反対してブルドーザーを雇い知念村の学校のグランドを自力建設してつくったが、その借金をどうしようかと泡盛を飲んで議論に花を咲かせていた。

–

もともとわれわれも、つまり大竹(康市)も富田(玲子)も樋口(裕康)も有村(桂子)も重村も相当天然の異邦人なのだが、次々に現れる旅芸人のような来訪者に象の舞台は昂揚した。漁村の研究者の地井昭夫も広島から来ると素晴らしいスケッチと共に訥々とした調子で、大分の保戸島の高密空間はどう面白いのか、遠洋漁業の集落では家に調査に行くと漁村婦人に口説かれる…と熱弁を振るう。磯の香りのする沿岸のムラが原寸で飛び込んでくる。麹町から面影橋の赤門寺境内のアトリエに移ると、ますますドラマチックになった。樋口と重村で探した物件は「独立家屋2階建て、30坪、電気あり、上下水道なし、井戸あり、環境静か、寂しいくらい」というふれこみのとおりで、近隣に迷惑をかけぬまさに舞台にふさわしい空間であった。

–

行ってみると、沖縄こそ舞台であった。那覇のコンテンポラリー世界にも驚いた(カヒシャープという看板=Coffee Shop、カリサクと書かれた伝票=Cutty Sark)。だが集落の空間の持つ小宇宙性にわれわれはまた興奮した。ガジュマルやフクギやクワディーサやアダンなどの植物が存在を主張しながら集落の空間を形づくっている。珊瑚礁から浜、畑を抜けて集落、そこから山へ、クサテの森へ、ウタキへと空間が貫く。集落のフクギやアカバナに縁取られた微妙にうねる碁盤状の細い道を、赤瓦の民家を垣間見ながら歩くと、ぽっかり空いたオープンスペースが緑の中にある。そこにある公民館はまるでガジュマルの下の能舞台のようである。カミンチュ=神人が神事に座るカミアサギという建築は、リリパット国の小さなおうちのように柱と屋根だけがあるミニマル建築である。そこでは旺盛な生命力がつくる環境の中に虚=voidな空間が中心にある。三線の奏でる饒舌なさまざまな出し物を、この虚だが力強い空間の構造が引き受けている。

–

私たちはこれを現代建築や現代の沖縄の地域空間に活かそうと考えた。だが当時のあらゆる設計の方向や計画の制度は、ことごとくこれらを否定するものばかりだった。まずは沖縄の地域空間を乱開発からどう守るかという土地利用計画などの仕事をすることになった。数年間はまるでカフカの“城”のようにつくらせてもらえない不条理を感じながら、背の丈を超すサトウキビ畑の中を歩きつつ、本当はつくりたいのにつくらせない、もちろん自分たちもつくらない規制の計画を立てるパラドックスを感じていた。若き日の地理学者の中村誠司や牧師の村上仁賢などとヤンバルを歩いた。その成果はあり、沖縄北部の地域空間の骨格のデザインにかかわることができた。建築レベルで本当に建てられる仕事は少なかったが、1972年の「波照間の碑」、75年の「今帰仁村中央公民館」、77年の「(名護市総合公園／)21世紀の森」、「石川白浜原公園」、81年の「名護市庁舎」は数少ない事例である。名護市庁舎竣工の日、屋上で日没を見送り、樹々がつくる漆黒の闇の世界で一晩泡盛を飲み明かし、名護湾に面する向かいの公園の丘の上で徐々に水墨画の世界が色づき、亜熱帯の生命がゆっくりと目を覚ます暁の薄明かりに包まれ、この劇的世界に感じ入っていた。

名護の海岸で。樋口裕康氏(左)と大竹康市氏
[写真：筆者／撮影：1981年頃]

しげむら・つとむ――建築家・工学博士／1946年生まれ。1969年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。同大学大学院博士課程修了。1971-78年、象設計集団設立、後に取締役。
現在、神奈川大学工学部教授、台湾科技大学客員教授、Team Zoo いるか設計集団主宰。神戸大学名誉教授、アメリカ建築家協会名誉フェロー、日本建築学会元副会長。
主な仕事：名護市土地利用基本計画・市街地基本計画[1974]、脇町立図書館[1986]、出石町立弘道小学校[1991]、城崎町営内島団地[1994]、出石町ひぼこホール[1994]、緒方町立緒方中学校[2002]、井上医院デイケアセンター[2003]、神戸市立玉津第一小学校[2007]、神戸大学病院こどもセンター[2008]など。
主な著書：『地域主義』[共編、学陽書房／1978]、『図説集落』[共編、都市文化社／1989]、『参加と複合』ルシアン・クロール著[訳、住まいの図書館出版局／1990]、『田園で学ぶ地球環境』[編著、技報堂出版／2009]など。